灰谷健次郎

Kenjiro Haitani

子どもという巨人

MESSAGE 2

労働旬報社

灰谷健次郎（はいたに　けんじろう）

児童文学者・作家。

1934年神戸市生まれ。

17年間の小学校教師生活ののち、1974年『兎の眼』を発表。

1979年山本有三記念第一回「路傍の石」文学賞受賞。

主な著書に『兎の眼』『太陽の子』『せんせいけらいになれ』（理論社）

『わたしの出会った子どもたち』『少女の器』『砂場の少年』（新潮社）

『教えることと学ぶこと』（小学館）等。

1980年から淡路島に暮らしていたが、

1991年5月沖縄・渡嘉敷島へ移住する。

[メッセージ21]——①

子どもという巨人

一九九一年四月三〇日発行

発行者　柳沢明朗

発行所　㈱労働旬報社

東京都文京区目白台二-一四-一三

〒112　電話（〇三）三九四三-九九一一

振替　東京〇-一八〇三七四

印刷所　㈱マチダ印刷

製本所　㈱坂本製本

装幀　相良　薫

カバー写真　御子柴　滋

［メッセージ21］ ❶ 労働旬報社

子どもという巨人
灰谷健次郎

MESSAGE
21

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

子どもという巨人

灰谷健次郎

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

1

子どもは、わたしたちが教え、導いてやらなくてはならない未熟なヒナドリなのか、または、大きな可能性を持った素晴らしい人間の原型なのか、という問いがあります。おそらく、たいていの人はその両面を持つのが、ほんとうの子どもの姿だろうというふうに考えているに違いありません。

しかし、じっさいに子どもに接しているようすを見ると、素晴らしい人間の原型としての子どもの方は忘れさられ、ひたすら、未熟なヒナドリとして扱われている場合が多いようです。

子どもと大人の対立の根は、きっと、そこから生じるのでしょう。

やむを得ないところがあるとはいえ、日々子どもに接している親や教師は、どうしても子どもの未成長な部分に目がゆき、ああだ、こうだと指図しがちです。

子どもの素晴らしさを素直に見ることのできる人間は、ときには職人さんであったり、芸術家であったりします。

学校でも、先生より、用務員さんや給食のおばさんの方に子どもの人気があったりします。

わたしは今から二十六年前、小学校の教師をしているとき、『せんせいけらいになれ』（理論社）という、子どもの詩の本を出版してもらいました。

最初に、この本のことに触れてくれたのは、なんと画家の岡本太郎さんでした。

たしか『週刊朝日』のエッセイ欄だったと思います。

先生

二年　おおつか　しんじ

おれ
もう先生きらいじゃ
おれ
きょう　めだまがとびでるぐらい
はらがたったぞ
おれ
となりのこに
しんせつにおしえてやっていたんやぞ
おれ
よそみなんかしていなかったぞ
先生でも　手ついてあやまれ
「しんじちゃん　かんにんしてください」
といって　あやまれ

岡本太郎さんは、この詩に触れて、子どもの怒りは鮮烈だ、この怒りを子ども「美」としてとらえる教師はいるか、という意味のことを書かれていました。

自分のことをいわれているのに、わたしはひたすら感動して、そのとき、世の中にはえらい人がいるもんやなアと思ったことを、きのうのことのように覚えています。

ゆき

五歳　うえだ　しんご

ふくのうえにとまって
なかにかくれて
ねてしもた

岡部伊都子さんは、この詩に触れて、ある雑誌に、つぎのように書いてくれました。

――灰谷氏の言葉に泣きそうになったのは、昨年の春だった。『リード』五月号の巻頭に「ゆき」と題した詩がのっていた。その何ともいえない可愛らしさに心うたれたが、その詩に対して短い感想を書かれた灰谷健次郎氏が、この詩を記録した人に感謝し、絶賛しておられるのを読んで、泣きたいような気分になった……。

たいへんほめてくださったのですが、そのとき、わたしは格別すごい評を書いたというわけでもありません。

「これはすごい言い方ですね。うなってしまいました。うえだ しんごくんもすごいけれど、このことばを逃さずキャッチして書きとめてくださった保母さんもすごい。ただただ感心して批評のことばがありません。」

今から考えると、このとき岡部伊都子さんがわたしに過分ともいえる文章を寄せてくださったのは、子どもというものはほんとうに素晴らしいものを持っているのに、それを素直に見ようとしない大人が多いということを、言外にいいたかったのかもしれません。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

女、子どもをばかにしてはいけないという差別的な言い方があります。

これは、女、子どもをばかにしているという前提があってはじめて成り立つ言葉でしょうから、ほんとうに女性や子どもを称えている言葉とはいい難い。

わたしが子どもは素晴らしいというのは、子どもの素晴らしさを見ることによって、自分もまた伸びるという視点です。

わたしの経験で語ってみます。

くろだ まこと君は学校一の問題児でした。（こういう言い方で、子どもにレッテルを貼ることにわたしは反対なのですが、いちおう、世間でいうイメージに従っておきます。）

気に入らないことがあると、道路に大の字になって寝ころがったり、校舎の樋（とい）を猿のように、よじのぼっていったりして、一年生のときの担任、まだ若い女教師をいつも泣かせていました。

その、くろだ まこと君をわたしは二年生のときに受け持ちました。

こういう子どもを関西のことばで、「ゴンタ」というのですが、まこと君はたしか

に、ゴンタの親分格のような存在でした。
後に、わたしは彼を主人公にして、『マコチン』（あかね書房）という童話を書きましたが、そこから、彼のゴンタぶりを紹介してみます。

「あそこのかんばん破ろか」
まこと君が言いました。かんばんは、サンタクロースの絵がかいてあるデパートのやつです。
「破ろ、破ろ」
おさむ君とたかゆき君は表から、まこと君としげる君は、裏からつきました。
ドンドンバリバリつきました。バリバリドンドンつきました。
「手がつかれたなあ」
まこと君は言いました。
「ほんまや」
ほかの子も言いました。いっぷくです。

「まだやらなあかん」
まこと君だけはいっぷくをしないで、ドンドンバリバリつきました。
道を通る人が、にやりと笑って通り過ぎて行きました。
しばらくすると、おふろ屋のおばちゃんが出てきました。
「そんなことしたらあかん」
おふろ屋のおばちゃんは、太った体をゆっさゆっささせて言いました。みんなは、急にはずかしくなって、てえーとにげて帰りました。

（新潮文庫『ろくべえまってろよ』所載の表記による）

たしかに、まこと君は手に負えないところもあるのですが、よく観察していると意味もなく駄々をこねるとか、だれかれ見境なく反抗するというのではないことに、わたしは気づきました。
たとえば図工の時間、自分の思った色が出ないといって、（わたしは二年生から水彩画の方法もとり入れてやっていました）泣くことがあるのですが、それは考えよう

によれば熱心さのあまりということになります。

思った色は出ないけれど、ま、このへんでいいや、と余裕の持てる子もいれば、まこと君のような子もいる。

みんな、それぞれ個性で、どちらがいいとか悪いという問題ではないと思います。

教師が、心からそう思って接してやればいいのです。

みんなが一時間、一枚の画用紙で絵を仕上げていくのに、まこと君は三枚くらい描きます。

この子は、学習量が多いのだから、それでいいと、わたしは思っていました。

一年生のときの担任は

「みんな一枚の画用紙にていねいに絵をかいているのよ。あなただけ特別にはできないわ」

といっていたらしい。まこと君はそれに反抗していたようです。

一時間で一枚の絵を仕上げることが、教育のいちばん大事な目標ではない。大事なことは絵を描く一時間のあいだに、どれだけ自分を燃焼するかということです。

熱中して、よろこびや感動を覚えれば、それが教育のめざした理想なのです。子どもたちが大きく変わるのは、そんな世界を獲得したときです。

一時間に一枚の絵を描く、というのは教師側の枠でしかない。

あらかじめ決めた、教師の枠から、はみ出るほどのエネルギーを持った子が出現すれば、その子を無理に枠の中にはめこむ努力をするのが教師の仕事なのではなく、その大きな可能性を持った子どもに添う方法や、世界をつくり出す努力をするのが、教師の本来の仕事です。

わたしはそんな大切なことを、「問題児」といわれたまこと君から教わったのです。

教師の矮小な価値観を、まこと君にただ押しつけるだけであったならば、いつまでたっても、この大事なことは、ついに学ぶことはできなかったでしょう。

まこと君は、こんな詩を書いています。

まね

二年　くろだ まこと

みんなはちょいちょいよその子の
「え」や「し」まねするけど
おれはまねはだいきらいや
ひとがはつめいしたことを
そのまままねするのはいやらしい
みんなのこころのなかには
くろいふくきたまねのかみさんが
ひひひとゆうてすんでんねんやろ

これは大傑作だと思います。

わたしは小説家で、芸術家のはしくれですが、まこと君のこの詩は、わたしだけではなくすべての芸術家がこころしなくてはならないもっとも大切なことを、きわめて

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c